

望ましい人間関係の形成を促す学級活動の工夫 —グループの児童同士で主体的に行われる活動の振り返りを通して—

井原市立大江小学校 教諭
石 部 圭 一

研究の概要

単学級・小規模校には、学級における児童の立場や役割が固定化しやすい傾向があり、本校にも、内面的なよさを互いに認め合いにくい実態があることが調査から分かった。多様なよさを認め合えるように学習展開を工夫した実践を行った結果、グループの児童同士で主体的に行われる活動の振り返りを通して、学級に望ましい人間関係の形成を促すことができるという手ごたえが得られた。

キーワード 学級活動、望ましい人間関係、振り返り、単学級、小規模校

I はじめに

全校 132 名、全学年が単学級である本校の児童は、穏やかでまとまりのある雰囲気の中、学校生活を送ることができている。一方で、6年間クラス替えが行われないことから、年度初めに担任が替わることによる影響はあるものの、学級における児童の立場や役割が固定化してしまっている実態が見られる。

平成20年1月の中央教育審議会答申では、好ましい人間関係が築けず社会性の育成が不十分である昨今の児童の状況などが指摘された。これを受けて、平成20年3月告示の小学校学習指導要領では、特別活動の各活動・学校行事のすべてにおいて、望ましい人間関係を形成していく態度の育成が求められるようになった。学級活動における「望ましい人間関係」とは、小学校学習指導要領解説特別活動編（以下「解説」という。）の中で「楽しく豊かな学級生活づくりのために、互いに尊重しよさを認め合えるような人間関係」と示されている¹⁾。

本校において児童同士が望ましい人間関係を形成していくためには、まず、よさを認め合うことが重要になると考えた。解説には、望ましい人間関係の形成の指導として新たに、社会的なスキルを身に付けるための活動を効果的に取り入れることなどが挙げられていると同時に、学級活動の指導の特質を踏まえた指導を展開し、児童が現実の生活の中で自主的、実践的に望ましい人間関係を築こうとすることができるように配慮する必要があることも示されている。そこで、本校第6学年を対象に行った調査から、よさの認め合いに関する現状をつかみ、その結果から、学級における児童同士の望ましい人間関係の形成を促す指導の工夫を探っていきたいと考えた。

II 研究の目的

学級活動において、児童同士の望ましい人間関係の形成を促すための指導を探るとともに、それを基にして行った実践を通して、効果的な指導の工夫について提案する。

III 研究の内容

1 単学級・小規模校に関する報告の整理

昨今、少子化や市町村合併などの社会の動きを受けて、学校の小規模化、大規模化が急速に進んでおり、全国各地では、学校規模の違いや学校適正規模に関する様々な報告が行われている。立川市、川崎市、浜松市、東大阪市の報告には共通して、単学級・小規模校の人間関係に関する

課題（表 1）が数多く挙げられている^{7)~8)}。それらの多くは本校における学級の課題と一致するものであった（表 1，●印）。この報告の整理から、学級における児童の立場や役割が固定化してしまう傾向は、多くの単学級・小規模校に見られ、人間関係に関する課題となっていることが考えられた。そこで、本校児童の実態をつかむために、学級で互いにとってどのような意識を持っているのか調査を行い、望ましい人間関係の形成を促す学級活動の工夫を探ることとした。

表 1 単学級小規模校における人間関係に関する課題

状態	影響
●人間関係が固定化している ●児童生徒の価値観が固定化している ●子ども間に序列ができ、それが継続されやすい ○経験が縮小し、狭い範囲で同じ活動が繰り返される ○安易ななれあいによる集団となっている	●多様なものの見方・考え方に乏しくなる ●仕事に固定されがちで、役割の変化に乏しくなる ○切磋琢磨して競い合う意識に乏しくなる ○意見の多様性に欠けてくる ○個性・能力の伸長が妨げられる

2 学級の友達に対する意識調査

(1) 学級の人間関係に関する予備調査

本校第 6 学年の児童 26 名を対象に平成 20 年 6 月に実施した予備調査（質問紙法：4 件法）では、「学級の友達（全員）には一人一人によいところがある」という設問に対し、19 名の児童が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した。この結果から、本校の第 6 学年の児童には、すでに友達（全員）のよさをよく知っていると考えている傾向があることがうかがえる。これは、長期にわたって同一集団による活動を積み重ね、学級の人間関係を深化させてきた結果と考える。

(2) 友達のよさに関する児童の記述

解説には、思春期にさしかかる時期の児童の価値観は、ときに、理想主義的であり、一面的で独断的な傾向になりやすく、相手に批判的になったり自分の価値判断に固執しがちになったりすることが示されている。そこで、友達に対してどのようなよさを認めているのか、また、どうしてそのように思うのかを尋ねる追調査を行った。児童の負担を考慮し、任意で定めた 4、5 名の班内の友達について尋ねることとした（質問紙法：自由記述）。

ある班の児童の記述を表 2 のように整理した。児童の回答は、運動や学習を中心とした能力的なよさと、内面的なよさに分類できる。この班の児童は、能力的なよさを比較的多く挙げている（表 2，網掛け）。理由の記述を見ていくと、能力的なよさは数値化したり、児童が他者と比較したりして認められたものであることが分かる（表 3）。一方、内面的なよさは、能力的なよさに比べて他者との比較がしにくい（以下「見えにくい」という。）ものが多く、学級の一部の児童しか認めることができていなかった。学級全体でも、能力的なよさが上位を占め、友達のよさに対する児童の

表 2 友達のよさに関する児童の記述

		記述の対象となった児童				
		A	B	C	D	E
記述した児童	A	運動がよくなる	習字がうまい	勉強がよくなる	社会歴史が得意	おもしろい
	B	やさしい	勉強がよくなる	社会歴史が得意	走るのが速い	走るのが速い
	C	走るのが速い	字がきれい	絵が上手	いろいろな人と話せる	走るのが速い
	D	字がきれい	絵が上手	いろいろな人と話せる		
	E	スポーツが得意				
	A	走るのが速い	水泳が得意	絵がうまい	元気	
	B	スポーツが得意	元気	歴史に詳しい		
	C	走るのが速い	体育が得意	勉強がよくなる		おもしろい
	D	勉強がよくなる	勉強がよくなる	字がきれい		頼りになる
	E	走るのが速い	走るのが速い	字がきれい	相談に乗ってくれる	
A	勉強がよくなる	勉強がよくなる	勉強がよくなる	勉強がよくなる		
B	おもしろい	おもしろい	おもしろい			

表 3 友達のよさと理由の記述例

能力的なよさ（理由）	内面的なよさ（理由）
○頭がいい（テストでいい点が多いから）	○相談できる（困ったときに話を聞いてくれたから）
○足が速い（50m走でタイムが速かったから）	○頼りになる（同じ登校班の班長をしているから）
○運動できる（A級バッジをもらっているから）	○正義感がある（けんかをとめてくれたから）
○字がきれい（いつも賞状をもらっているから）	○協力的（話しているうちにそう感じたから）

価値観には偏りがある傾向が見られた。このように、現状では多様なよさが十分認め合えているとは言いきれない。さらに、単学級・小規模校の課題を踏まえると、新たな手立てなしには、こうした状況が解消される可能性は低いことが予測される。

(3) 調査のまとめ

以上の結果から、本校において児童同士の望ましい人間関係の形成を促すためには、特に「見えにくい」内面的なよさについても互いに認め合うことができるような工夫をしていく必要があると考えた。

3 児童同士の望ましい人間関係の形成を促す学級活動の実践

(1) 指導上の立場と工夫の視点

解説には、特別活動の中心的な目標が「自主的、実践的な態度」であることが示されている。また、特別活動の内容の重点化や活動の精選化が求められており、様々な活動を有効に生かしていく上で、振り返りが果たす役割は今後一層重要になるものと考ええる。これらを踏まえ、児童が自主的、実践的に望ましい人間関係を築くことができるよう児童の主体的な活動を中心にする、活動後の振り返り段階に、よさを認め合う場を設定することにした。実践に当たり、次のような工夫の視点を持ち、計画を立てた。

ア 縦割り班活動への取り組みをテーマに取り上げる

学級で行う話し合いのテーマとして、縦割り班活動への取り組みを取り上げる。縦割り班活動とは、本校で従来取り組まれている小グループに分かれて行う異年齢集団活動のことを指す。学級の固定化した立場や役割から解放された中での取り組みを話し合いのテーマにすることで、児童は、これまで見えにくかった友達によさに気づきやすくなると考えた。

イ よさとして認めるための観点を児童同士が共有しておく

解説には、異年齢集団活動に取り組むことによって「豊かな人間性」が育成されることが示されており、具体的には、思いやり、責任の自覚、自律・自製の心などが挙げられている。したがって、縦割り班活動への取り組みをテーマに話し合うことを通して児童が互いに認め合うよさとは、多くが「見えにくい」内面的なよさに該当するものであることが予測される。これらを認めやすくするためには、よさとして認めるための観点を前もって共有させておくことが有効であると考えた。そこで、活動前に各自が役割を確認し、活動に向けた心構えを学級全体で共通理解する場として【学級活動1】を設定する。これによって、活動後の【学級活動2】では、互いの取り組みを評価するための観点が全員に共有されるようになるものと考えた。

ウ ジグソー学習法を参考にして学習を展開する

活動後の学級での話し合いが、よさを認め合う場として充実したものとなるように、アロンソン(1975)によって提唱されたジグソー学習法を参考にして学習の展開を工夫した(図1)。学級で話し合うときのジグソーグループ(以下「グループ」という。)を、所属する縦割り班が異なる児童によって構成されるようにしたことで、【学級活動2】では、グループのどの児童も他者が知らない情報を持っている状況がつけられ、だれもが自分の取り組みを話したい、友達の話を知りたいという意欲を持って話し合いに参加することができるものと考えた。

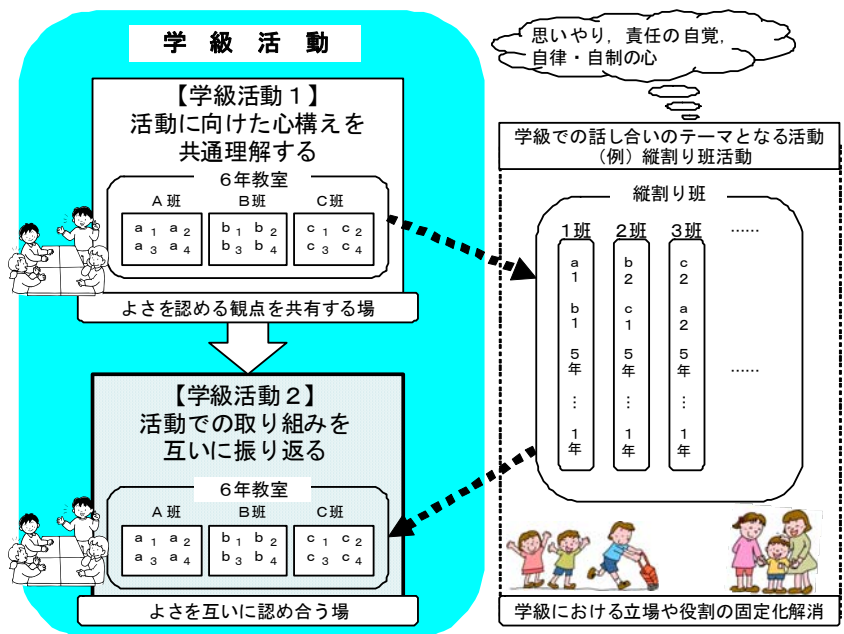


図1 ジグソー学習法を参考にした学習の展開

(2) 検証方法

【学級活動2】における話し合いの記録と事後に行う質問調査の結果を分析し、指導の工夫によってよさを互いに認め合っているかどうか検証する。

(3) 実践の計画と様子

ア 題材：6年生としての全校リレー大会（表4-2）への取り組み

イ 期間：平成20年10月27日（月）～11月7日（金）

ウ 対象：井原市立大江小学校第6学年26名

エ 計画と実践の様子：

全校リレー大会にかかわる活動の流れ（図2）の中で行った【学級活動1】と【学級活動2】の学習指導案と実践の様子を表4-1に示す。

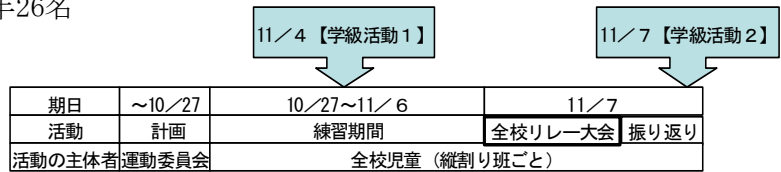


図2 全校リレー大会にかかわる活動の流れと実践の設定期日

表4-1 学習指導案と実践の様子

【学級活動1】 11/4（火）	ねらい	これまでの練習の取り組みを振り返り、これからの練習と全校リレー大会本番に向けた6年生としての活動の心構えをみんなで共通理解する。	
		学習活動（時間配分）	教師の支援・準備物
	1	これまでの練習の取り組みをグループで振り返り、本時の課題をつかむ。（25分） 全校リレー大会に向けて6年生としての心構えを持とう	○異なる縦割り班に所属する児童同士で4、5人のグループをつくる。 ・他学年児童の感想 ・他学年担任の感想 ○各グループの代表児童の発表を基に学級全体のスローガンとしてまとめておく。 ・大会本番までの日程表
	2	これからの練習と大会本番に向けて6年生として活動の心構えについてグループで話し合う。（15分）	
	3	学級全体のスローガンを作る。（3分）	
4	大会後の振り返りについて知る。（2分）		
	《実践の様子》	【学級活動1】は1週目の練習を終えたタイミングで行った。ジグソーグループでこれまでの練習の取り組みを振り返り、これからの練習と大会本番に向けた心構えについて話し合った。各グループで「下学年の児童に何をどのように説明しなくてはならないか」「どのような問題が起こりうるか、また、そのときの対応はどうするか」などが話題として取り上げられていた。各グループの代表児童による発表を基にして、『みんなに楽しく、優しく、分かりやすく』という6年生として全校リレー大会に取り組むためのスローガンをつくり、学級全体で共通理解することができた。最後に、大会終了後に同じグループのメンバーで振り返りを行うことを知らせ、学習の見通しを持てるようにした。	
【学級活動2】 11/7（金）	ねらい	全校リレー大会までの取り組みを振り返り、6年生としての心構えを基に互いに評価し合う。	
		学習活動（時間配分）	教師の支援・準備物
	1	本時の課題をつかむ。（5分） 全校リレー大会までに6年生として取り組んできたことを振り返ろう	○学級活動1と同じ児童同士でグループをつくる。 ○各グループに1枚ずつ話し合い記録表（図4）を配り、話し合いの様子を記録させるようにする。 ・振り返りカード ・各活動・学校行事年間計画表
	2	大会本番までの取り組みについてグループで振り返る。（25分）	
	3	印象に残った友達の取り組みを学級全体で紹介し合う。（7分）	
4	本時の話し合いについての振り返りカードを書く。（5分）		
5	今後学級で取り組む活動についての見通しを持つ。（3分）		
	《実践の様子》	【学級活動2】ではジグソーグループに戻って、2週目以降の練習と本番での取り組みについて振り返りを行った。単なる感想の出し合いとにならないよう、最初に全体で、【学級活動1】で共通理解したスローガンについて簡単に確認し、「6年生としてうれしかったこと・がんばったこと・困ったこと」をテーマに話し合いが行われた（図3）。グループで話し合った後、特に印象に残った友達の取り組みを学級全体で紹介する場を設けた。友達の問題意識を持ったことについての紹介に対し、学級全体でも多くの児童が共感的な反応を示すことができた。最後に、【学級活動1】で共通理解したスローガンを大切にしながら今後の活動に取り組んでいけるよう、全体に向けて声かけを行った。	



図3 児童が話し合う様子

表4-2 縦割り班活動「全校リレー大会」

全校リレー大会は全校を12の縦割り班に分けて行われる児童会集会である。リレーの経験が少ない低学年児童も参加するため、練習期間として本番前の2週間は、昼休みの運動場利用が班ごとに割り当てられている。第6学年のねらいは、様々な活動場面を通して経験が豊かになるとともに、異学年とのかかわりの中で、一人一人のよさが発揮されることにある。

(4) 結果の分析と考察

【学級活動2】の事後に行った調査において17名の児童の回答には、互いの取り組みを話し合う中で、友達に対して「見えにくい」内面的なよさに気付いていたことがうかがえる記述が見られた(表5)。一方で、友達一人一人に対する印象について尋ねた設問では、「変わらない」と回答した児童が過半数を占めた。このことから、よさに気付いたとしても、印象を変えるというレベルまで到達できていないという懸念も生じる。しかし、「変わらない」と回答した児童に理由を尋ねたところ、ほぼ全員が「前から印象はよかったから」「もともとちゃんとしているから」など、互いの取り組みを肯定的に受け止めていることがうかがえた。同設問で「よくなった」と回答し、事前と比べて友達の印象に肯定的な変容が見られた児童3名の記述を次に示す(表6)。

表5 事後調査における友達のよさに関する児童の記述例

- 6年生としてやるべきことをやっていると思った。
→(責任感, 積極性, 献身的な態度, 自制の心)
- 班長としての仕事ができているように思った。
→(責任感, 立場の自覚)
- 1年生の世話がよくできていると思った。
→(責任感, 思いやり, 我慢強さ)
- 班の人に思ったことがはっきり言えていると思った。
→(立場の自覚, 積極性, 自立)

表6 友達の印象に肯定的な変容が見られた児童の事前・事後の回答記述

	事前調査で挙げている友達のよさ	その友達の印象がよくなった理由
F児	○走るの速い(能力的) ○字がきれい(能力的)	自分といっしょで下学年がふざけて言うことを聞かなくてもよくがまんしていると思ったから。
G児	○運動できる(能力的) ○おもしろい(内面的)	班長としてちゃんとやっているように思えたから。
H児	○勉強できる(能力的) ○いろいろな人と話せる(内面的)	意外としっかりしているように思えたから。

表6に挙げた3名の児童の理由記述と話し合い記録表(図4に一例を示す。)を基にして、児童がよさを認めた要因について考察していく。

まず、下線部ア「自分といっしょで」というF児の記述からは、友達の話を共感的に聞くことができていたことがうかがえる。話し合い記録表には、それぞれの取り組みに対する他の児童からの反応や助言の内容が、「その気持ち、よく分かる」「そういうときは自分も注意した」などの記述として残っている。これらは、縦割り班活動の振り返りをテーマとしたことで、立場が互いに対等であることを前提にして話し合いが進められた効果と考える。

次に、下線部イ「班長として」というG児の記述からは、友達の取り組みに対し、基準を持って評価できていたことがうかがえる。これらは、よさとして認めるための観点をみんなで作くり上げ、共通理解する【学級活動1】を設定したことによる効果と考える。【学級活動2】では、一通り各自の取り組みを発言した後も、多くのグループで「どんなことに気を配ったか」「困っ

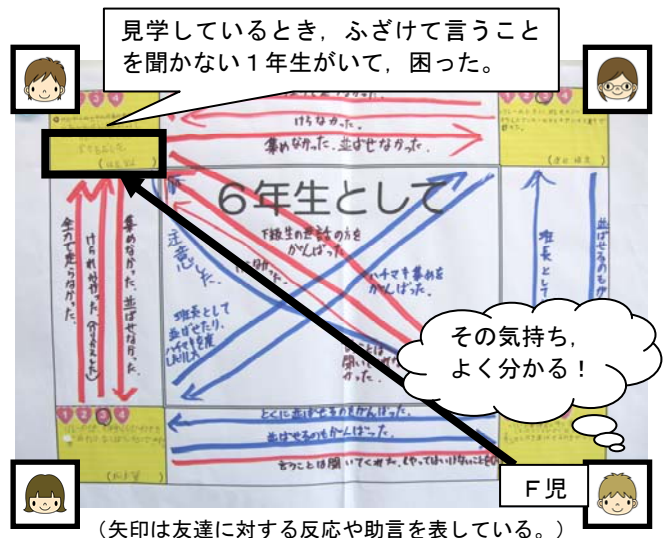


図4 グループ別話し合い記録表

たことはなかったか」など、児童自らが話題をつくってさらに話し合いが続けられた。このように、活動後に何を話し合い、友達の取り組みのどこをどう評価すべきなのかを児童が主体的に考えたことも、【学級活動1】による効果と考える。

また、下線部ウ「意外と」というH児の記述からは、多様な友達の取り組みに対して、普段とは違う印象を持ったことがうかがえる。本実践のように運営を児童に任せてグループで話し合いを行う場合、一部の発言力のある児童による発言に終始したり、形式的に順番に意見を出し合って終わったりすることが少なくない。話し合いの記録表の矢印の数を見れば、本実践では全員が発言し、そのすべての発言に対してグループの友達から適切な反応や助言があったことが分かる。こうした話し合いが行われたことによって意外性を感じ、友達の印象を肯定的に変容させた児童が生まれたと考える。

本実践を通して、学級26名中7名の児童が、9名の児童に対する友達の印象を肯定的に変容させた。児童の望ましい人間関係を築いていく自主的・実践的な態度が、様々な学校生活の中で緩やかに形成されていくものであるという見地に立てば、この数は、実践による効果が十分あったことを示していると考えられる。

(5) 結論

【学級活動2】を通して、「見えにくい」内面的なよさを認めることができた児童が生まれた。このことから、児童同士で主体的に行われる活動の振り返りを通して、望ましい人間関係の形成を促すことができるという手ごたえを得ることができた。

IV おわりに

本研究の取り組みを通して、単学級・小規模校の課題を踏まえながら児童同士の望ましい人間関係の形成を促すために、「見えにくい」内面的なよさを互いに認め合える指導の工夫を探り、具体的に提案することができた。

実践において友達の印象に肯定的な変容が見られた児童を対象に行った平成21年1月の調査では、7名中6名の児童にその印象が維持されていることが分かった。実践から2か月以上おいて行ったこの調査の結果は、児童同士で主体的に行われる活動が、その場限りで終わらず現実の生活の中で生かされる自主的、実践的な態度を育てていくものであることを示していると考えられる。また、【学級活動2】で用いた話し合い記録表を提示することによって、全員がその時に持った印象を想起し、教師の問いに喜々とした表情で答えた。今後の学級活動においても、友達に対して感じたよさが後になって確かめられる記録を残していくようにし、それを利用しながら、児童同士が望ましい人間関係を形成していけるような実践を積み重ねていきたい。

○引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説特別活動編」

○参考文献

- ・ 吉崎静夫 (1997) 「子ども主体の授業をつくる」ぎょうせい, pp. 82-87
- ・ 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2004) 「『社会性の基礎』を育む『交流活動』『体験活動』—『人とかかわる喜び』をもつ児童生徒に—」
- ・ C. S. L 学習評価研究所 (2005) 「グループのちからを生かす プロジェクトアドベンチャー入門 成長を支えるグループづくり」みくに出版, p. 81

○Webページ

- 立川市立学校適正規模等審議会
(<http://homepage2.nifty.com/osawa-yutaka/gakkoukibotekiseika-tousin3.htm>)
- 川崎市立小・中学校適正規模・適正配置検討委員会
(<http://www.city.kawasaki.jp/88/88kikaku/home/tekiseikibo/kangaekata.pdf>)
- 浜松市教育委員会教育総務課
(<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/lifeindex/study/school/tekiseika/kentoukai/shoukibokou.htm>)
- 東大阪市学校規模適正化審議会
(<http://www.city.higashiosaka.osaka.jp/230/230010/gakkoukibotekiseika/pdf/toushinsyo.pdf>)